
真相と虚構の狭間で

三枝一裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真相と虚構の狭間で

【Nコード】

N6542C

【作者名】

三枝一裕

【あらすじ】

「斜陽の彼方」の続編……。バイトを追われ失意の底から機転を利かせ、スポットライト煌く華やかな世界へ足を踏み入れる「若杉碧」。しかし……。思わぬ落とし穴が……。

1章1 静かなる躍動

《「斜陽の彼方」の続編です。そちらを先にお読みください。》

勤めていた キヤバクラグループと統括する千秋企画が組織的に非合法的活動を主謀していることが白日の下にさらされ 警察や公安によって広域的な捜査は 連日連夜続いていた。

組織的な経済事犯に有りがちで 予想された事だが 捜査のメスが入る直前に何らかの情報が漏れたのだろうか 黒幕と目される千秋企画の上層部は忽然と姿を消していた。まるで嘲笑うかのように不謹慎な表現になるが「あざやか」と言っても差し支えない程の手際の良さだった。

仙台市の本部に溢れていた 人も金も帳簿も証拠となるべく資料の類までが ものの見事にキレイさっぱり消えていた。「想定内」の有事を想定して日頃から各自の役割分担や情報収集を徹底させていた結果だろう。

皮肉な事だが捜査当局側のタテ割り行政の弊害も手伝った格好になったのだ。

同一県であれば 県警本部長が直接指揮を執り県警選りすぐりの経済事犯系 敏腕捜査員を中心とした捜査本部を配下の所轄警察署に設置させ 県警主導の捜査が遅滞なく行えるはずなのだが 今回のケースは容易ではない。

事件自体は秋田県内で発生し その主たる組織と上層部や指示系統

が宮城県に存在した。

流れ的には秋田県警の本部長から各県 県警を統括する東京の警察庁に事件の経緯を報告し指示を仰ぐ形になる。しかも今回は公安絡みであるから国家公安委員会を通す「役所ルール」が足かせになつたうえ 政治的 国交断絶に近い隣国との捜査の壁もあり 一触即発の深刻な国家的政治問題にもなりかねない。

そのため 内閣の機密諜報室や外務省の有事対策室にも順次諮らなければ結論には至らない……

当然 究極のタテ割り行政の最高位機関同士だ 自部門の責任範囲決めにしても 美しい「譲り合い精神」が露呈し 遅々として進まない……

とりあえず宮城県警が本部事務所と上層部の身柄を確保すれば良かったのだが

今回は事案が事案だけに「警察外」の仕事になる可能性もはらんでいた関係で宮城県警も責任問題に発展することを恐れて手も足も出せず 結果として

目前逃亡を ただ お行儀良く 指をくわえて見送っただけだった。捜査本部を宮城県警に置き 警察庁主導の捜査本部の方向で妥協がはかられたのは 秋田城西署が八橋の廃工場で千秋企画からの指示で踊らされていた

事件全容を知らない「下っ端」を逮捕してから 丸々2日も経過していた。

報道陣のフラッシュを浴びながら捜査員に両脇を抱えられ ジャケットを頭からスッポリ被った容疑者が パトカーに乗せられるシーンも 家宅捜査で当局がダンボール入りの押収資料をトラックに積み込むシーンもない……

そんな間の抜けた映像が流されていた

若杉 碧 はテレビのニュース映像と無表情なキャスターに目をやりながら

「何〜んで 逃がすかなア〜」と憤懣やるかたない険しい表情だ
異様に憤慨しているのは事件の黒幕を逃してしまったから だけではなかった

今回の事件が発覚すると同時に「メガクラブ 千秋」の店長 マネージャーは雲隠れしてしまい 連絡も取れないばかりか 食材や酒類を卸している問屋や
カラオケリースの会社が連日「債権取立て」に押しかけ 残されたバイト達がワケも分らないまま その対応に追われていた。

そんな状態で営業どころでなくなっただうえに 無人になった本部には小銭さえ残っていないかった。当然今日までのバイト代を期待できそうもない・・・

碧も被害者なのだ 債権取立て側に混ざって「金目の物」を物色する側に廻りたいぐらいだった。まさに「泣きつ面に蜂」の自分に失笑してしまう碧だった。

「次のバイト探さないと・・・ お金ないっし・・・」

実態の消失した このキャバで「バイト」している意味なんか無い訳だから

碧は他のバイト達と明日からのコトをアレコレ相談しているところだった。

そこそこ売れているキャスト達は 今回の事件で状況が一変する前から密かに他店からのルール破りとなる「引き抜きオファー」に耳を傾けていたから

突然の荒波に座礁し 沈没しそうになっても その「難破船」から
絶妙過ぎるタイミングで救命ボートに乗り移っていたのだ

しかし 碧のように裏方の仕事をしていると水面下での引き抜き合
戦に名前さえ挙がることもなく情け容赦ない荒波に翻弄され 吸い
込まれていく船と運命を共にする・・・碧のマインドは すっかり
荒波に もてあそばれる難破船だ

「ハア」 キャストやっとなれば 良かったかナア」と つぶやいて
みる・・・

ここに いても自分の居場所がないのは明白だった
従業員控え室へ急ぎ自分が使っている ロッカーから予備の着替え
と傘を取り出し 愛着を感じ始めていた縁取りプレートの「みど」
と書かれた扉を閉めた

この部屋にはキラキラした店の華やかな部分とドロドロした人間の
強欲が交差し 微妙な空気が漂っている 重苦しい空間であり 心
躍る空間でもあるのだそして 憧れにも似た想いで見上げていたキ
ヤスト達の売り上げグラフを今日だけは複雑な想いを胸に しばら
く見詰めた

最後の挨拶をしようと店の裏口から首だけ 突っ込んだ碧に他のバ
イトから声が掛かった・・・「ねえ」みどに話があるって誰か来てる
よお」と正面入り口の方に面倒くさそうに視線を飛ばした

「取立て？ だったら最悪っ」 食材や酒類の配達なんかで業者が来る
と受け取りサインを碧がしていたから 「代わりに払ってくれ！」
なんて言われても当然払うつもりもないし 払える額ではない・・・

碧は厨房に入りなおし カウンターの陰からその方向を盗み見るよ
うに様子を

チラ見してみる

ちょうど 入り口近くに貼り出してある「お客様への注意書き」を熱心に読んでいる チョイ細身の半ジャニ系の男が視界に飛び込んできた・・

歳の頃なら30前半といったところか 記憶を巡らしたが出入り業者の顔には該当しない しかもチョイ「イイ感じい」

「あのぉ」遠慮がちに碧は近付いて 軽く頭を下げると同時に男が身体を戻し端正なマスクに上品な笑みを浮かべ ヴィトン・モノグラムの名刺入れから
スツと2本の指で名刺を1枚抜き出し スマートに碧の右手の前に差し出した 微かに柑橘系のコロンの香りを伴った空間を「大人の男」が一瞬にして支配し

「ウチで働いてみませんか？」と碧の瞳を大人の瞳がとらえる
名刺に目を落とす

「ONE MORE CHANCE」マスター 「桜庭 翔」
と書かれている

ワン・モア・チャンスと言えば ここ東北有数の歓楽街 川反エリアでも老舗に属し 少しは名前の知られた高級バーで 顧客の多くは川反で水商売を営む経営者が多く その厳しい目にも認められた
「厳選された 大人のバー」だ

ついさっきまで 沈没寸前の難破船に独り取り残された碧にとって
は まさに「渡りに船」となった格好だ・・

しかも・・ONE MORE CHANCE ・・（もう
1つの好機）

意気消沈していた碧には これ以上相応しく縁起の良い響きなのは
間違いない

「はいっ！すごいオツケーです！」と言いたい気持ちをグツとこらえた碧は

「は・はい 考えてみます・・・」そう言っ て 軽く頭を下げた

簡単に返事をして いかにも待っていました！といった感じじゃ安っぽく見られる それに いつも自分1人で決め ツツ走り後悔している自分への戒めと 母親の「ユミ」にも相談した後に返事をしたいからだ

「じゃ いい返事 待ってますから」とユニセックスに仕立てられた甘い声と大人の上質な香りを残し 半ジャニ系の男は スマートに去って行った

店の狭い駐車場から愛車の「黒メタbB」を出すのも これが最後・・・・

灯の無い「メガクラブ千秋」電飾蛍光管をルームミラーに映しながら 同時に

高級バーでシェーカーを振る黒服の自分の姿を思い浮かべて 口元を緩ませた

駅の西側の城西地区とは逆の東側方向 城東地区に向けてハンドルを切る

碧の気持ちは固まっていたから黒メタbBも今日は無口だが走りで祝福しているかのような 妙に足回りが軽い

城東消防署前の信号待ちで「おとん」にも知らせようとメールを飛ばした

「・・・おとん 聞いて！聞いて！川反のバーでバイトするからねっ・っ」と

数日後 碧はワン・モア・チャンス のマスター「桜庭」に電話を入れていた そして バイトすることを 言葉を選びながら 慎重に伝えた 相手が大人を意識させる立ち振る舞いだっただのと今までとは違った環境への わずかな気負いがそうさせたのかもしれない・・・

そして 碧は 新しい世界に飛び込んだ

上質な大人の空間に身を置いた碧はキャバとは違った大人びた顔立ちになったブラックとゴールドを基調としたクラシックモダンのインテリアに壁面を埋め尽くすように並んだ硝子棚を見上げ 溜め息が漏れる

装飾硝子扉の最上段には「ドンペリニヨン」の渋いラベルがひときわ目を引く

ドラマだけの世界が 今日の前に しつとりと落ち着き払って展開している

碧はキッチン内での簡単なオードブル作りとカウンターでの補助的な仕事から入った 当然と言えば当然だが いきなりシェーカーを振らせてもらえる筈もなく 上客相手の接客 特に言葉遣いに注意を払う事に忙殺されていた

キャバとの客層は 相当な開きが有った 裏方がメインのキャバ仕事でも 時々テーブルメイクの時など 軽いノリの客に 適当に会話を合わせていれば済んでいたのだが このバーでは会話だけでなく表情も大人の演出を求められ 内面的な自己研鑽も求められる日々が続いた・・・

1カ月も 経った頃だった 碧は自分への特異な視線を感じ始めていた

客の多くは複数で来店し仕事系の会話をしている事が多く 碧はその会話の邪魔にならない程度に接していたのだが ある客が来店するたびに 碧の仕草に 何度となく 熱い視線を注いでいる・・・

1章2 スポットライト（前書き）

各マスコミの表記統一により

「レポーター」表記から

「リポーター」としています。

1章2 スポットライト

「誰なんだろう？ あの人？ アタシの美貌にホレたとか？」

その客は いつも 赤ワインベースのカクテル「カーディナル」を注文する

芳醇な深みに満ち溢れた香りで 個性的な大人を演出させるカクテルだ

視線を合わさないように カクテルを運んだ碧の 顔を覗き込んだ
その客は

「いつも気にしてただけど リポーターとか興味ないかなっ？」
「はあ？ リポーターですかあ？」 突拍子のない申し出に困惑するばかりだ

差し出された名刺に目をやる余裕などない 慌てて厨房に戻り名刺に目を落す

CAT (ケーブル・アキタ・テレビネットワーク) 株式会社
総務人事課 チーフ 「佐藤亮平」・・・

CATと言えは秋田ではメインのケーブルテレビ局で 通称「キャット」と呼ばれ

クロネコのロゴマークで親しまれ 秋田市民なら誰でも知っている存在だ

その足で カクテルシェークを終えた半ジャニ系マスターの桜庭に
その名刺を見せ「これ もらったんですけど・・・」と そつと差

し出した

「ああケーブルアキタの佐藤さんかあ」さらに

「ちよつと前から碧ちゃんに目つけてたみたいだネ」 平然としている

「えっ？マスター知ってたんですかあ？」

「実は佐藤さんから何回もオファーがあつたんだよ ウチは困るから断ってきたんだけどネ」 でも直接交渉かあ 大胆だよナア ホント」

この業界では引き抜き行為は「はつとご法度」しかしマスターは意に介さない様子だ

「碧ちゃんに今 抜けられると痛い でもやってみたいならチャンスかもネ」

そう言つて蝶ネクタイの半ジャニ男は 碧に軽くウインクを飛ばした
「マ・マスター……」 碧は次の言葉を上手く継がないでいる……

「まっ・何がしたいか自分で考えて 結論出せばいいからネ」そう言い残すと次のカクテル準備に入つた その後姿に大人の余裕みないなものを碧は感じた

次の日 碧は「おとん」に電話をしていた 今回の件を伝えるためだ
「はあゝっ これ以上バイト増やして いつ寝るん？ 身体もたんやん！」

いつもの「独り暴走族」の碧に いつもの 呆れ果てた戒めの言

葉だ

「仮眠すれば 掛け持ちも 何とかなるよぉ 絶対やりたい仕事
だしっ」

「まあゝた 始まったよ 碧の 必殺やりたい病・・・はぁゝゝ」
とあきれ声

気紛れで好奇心旺盛なのに飽きやすい性格は母親譲りで誰にも止め
られない

「おとん」である「一裕」も碧の母親 「ユミ」に振り回され続け
今更驚くこともないのだが さすがに今回は体力的な問題から
賛成は出来ない

「あのさぁ・・・」と言いかけた電話を「てか やるって決めたしい」
と一方的に切ってしまった 例によっていつものパターン・・・

数日後 突然 一裕の携帯が鳴った

「聞いて！聞いて！おとん！ 業界人間になったよっ！」 声が割
れている

「えっ 何だつてえ？ 碧が 妖怪人間だつて？」

「もしもおゝし ようかい ぢやなくてえ 業界だよお おとん！」

「今度はカンペキだつて！すごい 続ける気マンマンだしっ」

一裕は失笑するしかない・・・

「寝不足になるのは 碧 本人じゃなくて俺かも・・・」

と暗くなつた液晶面を ずっと眺めて目を細める 一裕だった

こうして日中はケーブルアキタの仕事をこなし 夜から明け方まで

バーでの

「二束のわらじ」生活はスタートした・・・

また　すぐ飽きてしまつて弱音を吐くだろうと一裕は高をくくつていたのだが

好奇心旺盛さが幸いしてキツイ生活パターンにも慣れてしまった様子で　若干拍子抜けした感じで日々は流れていく・・・

しかし　勤務時間も勤務内容も一定パターンが存在しないマスコミ業界のコト

碧的にはIPPパイIPPパイの生活だったようで「おとん」へのメール回数が減つていったのを一裕は憂慮していた

「ダイジョウブだよ」たまにくるメールにも勢いと絵文字の数が減っている事から一裕は「大変そうだな」と判断するしかなかった

バーの時と同じで最初から責任のあるリポーターの仕事を任されたワケではなかった　撮影クルーの弁当手配や　宿泊場所の予約　そして撮影機材の運搬が新入社員の主な仕事だった

この業界での「花形」であるリポーターやキャスターになつてスポットライトの向こう側に絶対立ちたい！そんな強い思いが飽き性の碧を支えていた

そんな思いからか19歳　「若杉　碧」は他の同年代の社員と一味違つていた

撮影クルーが遠方取材の宿泊先は後で編集作業が楽に出来るよう大通りから少し離れたビジネスホテルを予約し　取材資料編集に欠かせないインターネット

設備が完備されていることにも配慮していた

そしてこの業界には絶対外せない儀式「打ち上げ」が出来るイイ感じの店も事前によりサーチしスタッフの信頼も得ていた

その他にも徹底的に気配りをしていた 取材先が老舗旅館の場合は温泉効能は当然の事 築年数や建築様式に使ってある建築材料などを事前に調べ そして

その旅館の こだわり が何か？まで事前に調べあげて 本取材前に先方への

ホメ言葉の中で多用し 気持ちよく本音を引き出すことに成功していた

美容院やレストランのオープン取材には自腹で花束と店舗の雰囲気に合わせて花瓶を持参し 彩りを添えたり 他店舗との差別化を意識したコンセプトなどを自分なりの言葉で 先方の「ここがウリ」ってところをくすぐった

取材時に先方への手土産も忘れなかった 相手の年齢層に合わせてケーキとかようかん なんかを持参した しかも名前がちゃんと通っている逸品ばかりだ

そんな隠れた努力が実を結び ただのスタッフだった「碧」は皆から信頼され重宝がられる存在へと成長していく……………

1章3 企画会議

裏方の仕事をこなしながら形式上の研修期間が終了した碧は正式にCAT「編集課」へ配属され 業界人間の一員となりリポーターを目指して悪戦苦闘の日々を送っていた・・・

しかし・・・碧の前途は順風満帆とは言い難いものだった

ケーブルテレビの加入者は 視聴者の多様化などで 伸び悩んでいたのだ

それに伴って スポンサーからの広告収入も頭打ちから減少に転じていた

主な視聴者は日中に時間がある 主婦やお年寄りが多く スポンサーとしては購買能力のある層への訴求力に欠けマーケティング的に費用対効果が無いとして敬遠する傾向が顕著となっていた

もはやケーブルテレビの存在意義とも言える地域密着一辺倒では通用しなくなっているのは誰の目にも明らかだった

「何が何でも加入者が増加する企画を立ち上げよ」危機感をつのらせた上層部からの至上命令が

社屋の壁に 社内メールに 発令された

その矛先が 主に製作部に向けられたものである事は容易に理解できる

「製作部」は「企画課」と「編集課」で構成されていて 碧は編集課に籍を置いていた

といっても小さな組織なので企画の手伝いもしていた いや やらされていたと表現した方が正しいのかもしれない

早速 企画会議が召集された 会社には大きな会議室がなかったから千秋公園南にあるシティホテルの会議室で開催された
出席者は会社上層部 製作部 営業部 総務部 管理部 各部の管理職クラスが一堂に会すると威圧感がある

そして なぜか碧も女性代表として席に着いていた 編集課には碧の他に3人の女性リポーターと 2人の女性キャスターが在籍しているのだが

他の女性社員はニュース番組の収録や現地取材が事前に入っているという理由から出席できなかったため

碧に白羽の矢が立ったのだった

女性の観点から意見を求められる事もある関係で誰かが「犠牲」になる この会社の慣例のようだ

会議進行役を務める営業部次長が口火を切り会議は開催された

多くのスポンサーからの要望や意見を伝えるため営業部が主導権を持った会議になるのだが

会議と言っても名ばかりで

営業部が企画課や編集課の無策を「いくら営業部が頑張っても製作部に引っ張られる」

とアピールするのが本来の目的じゃないかと疑ってしまっぐらいに

責任転嫁の発言が目立つ

「あんな番組じゃ視聴者は納得しない　だから　加入者が減るんだ！」

「加入者数が減るからスポンサーが離れて　会社の業績が悪化するんだ！」

製作部は防戦一辺倒だ　うつむいたまま　ひたすら耐えるしかない・

「黙ってないで何か発言したら　どうだ製作さん？」営業次長の皮肉たつぷりの言葉が製作サイドに　あびせられる

しばらくの沈黙が流れ　企画課長の石井と編集課の栗原が控えめにお互いの顔を見合わせて　沈黙に押しつぶされる恐怖に負けた栗原が精一杯に搾り出した

「再度・企画を練り直します・・で・時間を・時間をください」

上層部から　少なからず溜め息が漏れ　大きな会議室に小さく響いた

碧にとっては　社会に出て初めての「会議」経験になった・・・誰の発言も善処だの前向きに検討だの　抽象的で内容の伴わないモノばかりだ

「あのつ・・言ってもイイですかぁ」シーンと静まりかえった会議室に若い女性の声がした　碧の声だ・・・

一瞬にして凍りついたのは直属の上司　小心者の栗原だ　額に油汗をにじませ必死になって隣から碧に懇願の視線を送る・・・

しかし 人一倍負けず嫌いで理不尽な扱いが許せない碧は もう止まらない・・・

「これって会議？てか イジメですよっ」会議室はにわかに騒然とした

「魅力ある番組創り とかぁ みんなで話し合っんですよね？ この会議・・・」

・・・ 息詰まる空気は そのまま場を支配し続けている・・・

「まあ 女の子の意見は新鮮で結構だが 場をわきまえんなア 栗原君よ」

営業次長の冷め切った声に 栗原は小刻みに震えながら ただただ身を縮めて 熱くなった碧を片手で制し涙目で見詰めるしか 成す術が無かった・・・

波乱の展開となった会議も なんとか終わったものの 栗原はその後も次長や部長クラスから こつてり絞られた後 製作室に戻ってきた・・・

会議での武勇伝発言を聞きだそうと碧の周囲に女性アナを含め若手のスタッフで人垣が出来ていた

会議となると突然仕事が入る要領を得た連中に碧は戸惑いながらも律儀に答えていた 先輩達からの質問だ 無視する訳にもいかない

栗原の入室を察した若手の一人が 何も無かったように静かに持ち場に戻る そして

それが合図にでもなったように人垣は　クモの子を散らすように
四方に散っていった

栗原はたった数時間で疲労もピークといった感じで椅子に崩れ落ち
ると窓の外に

視線の定まらない　うつろな目を向けた

栗原の憔悴しきった姿・・・そして自身の発言・・・
負けず嫌いの　若杉　碧は　もう戻れない

翌日から積極的に碧は動いた・・・一心不乱に
「報道」とは何なのか？

何をどうしたら上層部や栗原が喜ぶ企画になるのか？

会社の窮地を救える起死回生のウルトラ企画が出せるか？　まった
く見当もつかない

碧が最初に考えついたのが　頼れる「おとん」に相談する事だった
千秋企画事件の時に名古屋から大雨の中　高速を飛ばして愛娘「若
杉　碧」を救出した

血縁関係こそないが碧の父親　「太田一裕」その人だ

「　おとん！そーだん」したいっ　「カラフルなメールが一裕のデ
スクで振動している

一裕は開発許可申請の図面をパソコンで作成しながら　携帯を横目
で確認すると

電卓を操作するフリをして「おっけい」と素早く返信した

今回は何だろっ？　バイト？お金？異性関係？と今までの経験から

思いを巡らしてそれぞれの対応と善後策を図面を描き進めながら思考し始めていた

「報道って何？」

一裕にとつて 夜の電話は意表をつかれる展開だった・・・
「そりゃ真実を そのまま伝えるコトだろう」

極めて普通に答えられて 碧も困惑した

「そんなコト分かつてるよお」 その意味くてか 何を伝えるかだよお」

「ほやから」真実を伝えるんが 報道やん」・・・

碧は消化不良のまま電話を切った

「おとん ダメじゃん・・・」 碧はちよつとだけ 一裕に失望した・・・

翌日 碧はある人物を尋ねていた「北都新報」の佐竹だ

千秋企画事件で碧が独占取材に協力し そのスクープ記事で他紙を出し抜き 北都新報 そして報道記者 佐竹は一躍世間の脚光を浴びた

一旦は出世コースから外れたものの特ダネを追い続け 地道に調査取材を続けていた

「隠しネタ」千秋企画事件が一気に結実し 佐竹は局長賞を手中にし 今や

飛ぶ鳥を落とす勢いの 報道記者だ

碧は期待を込めて　一裕と同じ質問をプロ中のプロ　佐竹にぶつけてみた・・・

「真実を伝える事！」・・・と自信に満ちた　まさに即答だった　さらに付け加えた

「真実報道が　いかに簡単で　いかに難しいか　毎日がジレンマの連続だね」

佐竹は応接室のソファーに改めて深く座り直し両手を組み天井に視線をやった・・・

「実はこんな事件があつただけ　知ってるかな？」

「城東エリアのマンションばかりを狙った強盗事件が続発したのを」
「はい知ってます」

「マンションの無防備な4階や5階だけをターゲットにした強盗で
独り暮らしの女性ばかりを狙い　女性が帰宅した深夜に樋を登って
バルコニーから

侵入して　現金や貴金属を奪う手口なんだよ」

「ところでえ「樋」って何ですかあ？」

「雨が流れる縦方向に延びる外壁に取り付けられた管でマンション
の場合は

一般住宅より丈夫に作つてあるから　大人1人ぐらいなら支えられるんだよ」

「報道は被害を伝えたが樋を使つたと伝えなかった」・・・

「その理由が分かる？」

とつさに問いかけられた碧は見当もつかなかった・・・

「模倣犯を恐れたからなんだ　他社も同じ理由から　犯行経路は伏せた・・・」

「結果それが 裏目に出て 同様の事件が発生した」

「真実を詳細に伝えられないジレンマ そして・・・」

「事件がなくなつて欲しい反面 事件記事自体は欲しいジレンマ」

「そうだねえ・・・うーん・・・」

「事実報道のジレンマつて そんなトコかな」神妙な面持ちで佐竹は締めた

北都新報の正面玄関で別れ際に佐竹は 思い出したように こう言つた

「昨夜 ある人から電話があつて さつき碧ちゃんからされた質問と同じ事を聞かれ

正直答えに困つた 長年この仕事をしてきて いまさら答えられなくて恥ずかしかつた・・・」さらに佐竹は続ける

「その人から こう言われた『真実を伝える事ですよね』と・・・単純だけど異論を挟めないほど明快な答えだったなあ」とニツコリ笑つて 不思議そうな顔をしている碧に背を向けると右手をチョコンと挙げて 報道部へ消えた

「もおーっ おとん まった 余計なコトしてるよおー」独り言をつぶやきながらも

北都新報を後にする碧の歩みは 心なしか軽やかだ・・・

何日も何日も新しい企画のコトで碧は頭がイッパイだった

意地っ張りで負けず嫌いの性格が災いして 他の事がまったく手につかない不器用な碧だった 自慢の愛車「黒メタbB」で深夜

の新国道を疾走していても

寝ても 覚めても そして マックでシェークしてても……

新企画立ち上げのコトばかりが頭から離れないでいた……

碧は おとんに連絡するのを避けていた 近い存在だけに負けを認める感じがイヤで

何となく 意識してそうしていた

それが碧の おとんに対する「反抗」でもあった……

今回の企画会議までに上が納得する「新企画」をプレゼンしなければいけない……

いたずらに時間だけが過ぎていき アセった碧は おとんに電話をした

「ねえ どんな報道企画がウケるかなあ？ このままだとメチャヤバっ！」

「じゃ逆に碧がニュース見てて感じるコトは？」

「えっと……分かりにくくて どこも同じコト伝えてるって感じ……」

「じゃ～分かりやすくして他局と違うニュースにしなよお」おとんは普通に答え

「ニュースを再検証し違う切り口で深掘りして簡単に伝えたら喜ばれるぞお」

おとんは電話の向こうでノー天気にかラカラと笑っている

「ワケ分かりそうで 分かんないよぉおとん……」……

「ねえ」・・・

すぎる碧に　気紛れおとんは笑いながら一方的に電話をブチ切ってしまった

いつも碧に宿題を出しては　困らせるのが「一裕」の密かな楽しみだったから

碧的には面白くない　いつか仕返しの宿題を出してやろうと計画していたのに

今回も見事に　逆カウンターパンチをくらった形だ

「報道の再検証」そして「違う切り口で深掘り」かあ・・・

アパートに帰った　碧は各局のニュースを改めてチェックし始めた
やはり　どの局も事実関係を淡々と伝えているだけに過ぎない

「うつぜ」キャスター　黙ってれって」

「誰が悪くてこんなになってんのあ？」

「対策はどうするのあ？」

「そして結果は？」

画面に向かって独りでツツコミを入れている自分に　「ハッ！」とした

一方的に伝えるニュースはどこにでもある・・・でも
視聴者の「なぜ」に応えるニュースはない

「それだ！それを伝えればイイんだア！」思わず　ペンを握った手で

小さくガッツポーズをした 若杉 碧だった

企画として成立するか？

そんな事を考える余裕などなかった・・

疑問に感じたら 徹底的に納得するまでやる ただ それだけだ

碧は北都新報の佐竹から聞いた「報道のジレンマ」を思い出していた・・・

そして 城東エリアで 頻発していたマンション強盗事件を「報道再検証」の題材にしようとし 取材情報が保管されている 製作部 管理課を尋ねた

他社の新聞切り抜きや撮影されたビデオテープが日付やタイトルごとに保管され
必要な時に報道資料として引っ張り出すための倉庫兼管理事務所なのだが

管理課といっても 人数はたった一人 定年を間近に控えた「生き字引き」と称される
社内きつての変わり者ガンコオヤジ「檜山堅一」に取材記録を見せ
てもらったためだ

重い鉄の扉をノックし返事のないまま中に入る 永く閉ざされた空間は空気がよどんで

図書室と理科準備室を連想させる臭いが一瞬鼻を突いた 一番奥の書類に埋もれたデスクで

背中を丸め老眼鏡の上部から碧の様子を伺っているのが「檜山」ら

しい

一人しかいないのだから間違っ箒もないのだが・・・

「あのっ 編集課の若杉なんですけど 事件の資料が見たくて・・・

」

相変わらず老眼鏡を少し下げ 上目使いで 次の言葉を待っている様子だ

しばらくの沈黙が かび臭い閉ざされた空間に流れ・・・

「もう終わった事件の資料が 何で見たいんだ？」低くて しゃがれた声

「終わってないんです・・・まだ・・・てか 続いてるんですたぶん・・・」

支離滅裂な言葉の羅列に 碧自身動揺しながらも 北都新報 佐竹との会話で事件として

解決していない事 新企画の事 報道の在り方などなど・・・

多少前後しながらも 碧は熱く身振り手振りを交えて檉山に伝えた・・・

「資料は全部ここに入ってる」と会社の大封筒をデスクの上にポンと投げ

他の資料のタイトル整理にとりかかった

「ど どうも・・・」もう少しマシなビジネス用語でも使えば良かったのだが

ここまでの経緯を説明するのに全精力を使い果たした碧にはこの言

葉が限界だ

重い扉を押している碧の後ろ姿に「あんたの事は聞いてる　がんばんなさい」

と書き物ついでに発した声が　碧の背中を力強く　そして優しく押した・・・

資料には報道されない部分も含め　実に多くの情報が詳細に盛り込まれている

会社独自に事件ごとにタイトルと番号がついて　関連しそうな事件は事件番号が参考についている　今回は城東エリア以外で発生した強盗事件も関連事件の疑いありとして同封してある　檜山の配慮に改めて感謝する碧だ

内容は事件ごとにファイルしてあり被害者の実名　住所　電話番号　生年月日　勤務先　被害内容が事細かく列記してある　多くが警察による記者会見発表を元に各社が独自に取材したもので　さらに報道各社間での　取材協力に名を借りた　情報の「物々交換」により成り立っているのが実情のようだ

その中から　最近　城東エリアで発生した事件を地図に落とし込み発生時間

発生階数　被害内容　被害者の特徴を赤ペンで記入した

地図に落とし込むと　確かに狭いエリアで発生しているのが分かる・

翌日からバーの終わった未明　睡眠時間に充てるはずの時間を利用

して赤ペンと地図を手に
事件が発生したマンションの再調査に取り掛かった

被害のあったマンション外観を携帯電話で撮って 地図に自分なりの考察を書き加えた・・・道路の位置 バルコニー形状 そして「樋」の位置

碧の足が止まった 先週被害に遭ったマンションだ ちょうど4階の端部屋で
一人の若い女性が洗濯物を干しているところだった そう 強盗被害の部屋だ

そのままの足でエントランススペースのオートロック操作盤の前に立って部屋番号を入力し
呼び出しボタンを押していた

碧は自分自身何がしたいのか説明がつかなかった もう「好奇心」で説明するには無理という他ない・・・

呼び出しの上品な電子音が静まり返った早朝の エントランスホールに静かに響く・・・

総てを知りたい そんな好奇心・・・そして それを伝えたい そんな使命感・・・

碧の思考は その両方の思いで 揺れた

少しの後悔もないと言えば嘘になる

少しの間があってテレビインターホンからの返事「どちら様ですか？」相手から碧の様子は見えている

「ケーブル・アキタ・テレビの若杉です 聞きたい事があって来ました・・・・・・・・」

「取材とか・・・断ってるんです・帰ってください・・・」わずかに動揺している

「取材つてより・・・こんな事件が2度と起きない ヒントが欲しいんです」

「迷惑とか掛けません！犯人は捕まってるんです！協力してください！！」

しばらくの沈黙・・・・・・・・

「解りました・・・・」カチッとオートドアが解除され静かに扉がスライドする

シンプルにまとめられた部屋に通され 小さなソファを勧められる

事前に調べていたから この被害者が同じ年齢だと碧は知っていたが あえて 碧から触れずに 相手が切り出すのを待った・・・・・・・・

同じ女性 しかも同じ年齢だと分かり 相手の警戒心は自然と解けていた・・・・
被害者は「山根綾香」市内の信用金庫に勤める19歳 碧と同じ学年だ

最初は無難な世間話やお互いの仕事上での失敗談で次第に場が和み
いよいよ本題へ

綾香の表情が一瞬曇ったものの 碧への信頼は確かなものになって

いた

浸入経路となったバルコニーを見せてもらい地上からの高さや
テ樋の位置

を携帯で撮影し　樋がどれだけの強度があるか実際に体重を掛けて
引っ張ってみるが

かなり強固に取り付けてありビクともしない

「これじゃ　どうぞ　登ってくださいってカンジ・・・」小さくつぶ
やく・・・

「4階で無防備」であるかのようなニュアンスで報道されていたが
綾香の話では当日サツシの鍵はかけられて　いたが　特殊なガラ
ス切りで音もなく浸入され　声を出す間もなく　口をふさがれ　そ
して一瞬にして縛られたという・・・

報道で伝わらない　いや　伝えていない絵が見えてきて　伝える側
に身を置いている碧としては　穴があつたら入りたい気分になせら
れた

今回の取材を元に　報道の「在るべき形」を積み上げ　輪郭がつか
めた・・・

取材から帰宅した碧は寝る間を惜しんで「企画書」作りに取り掛か
り　レポート用紙に

「報道再検証」「独自の切り口」「更なる深掘り」と殴り書きし
それらの項目に小さく説明を書き足し　たった1枚だが　立派な企
画書を作り上げてしまった

もう出勤の時間になっていた　メイクしてる時間などない　「企画書」を握り締め　黒メタbBに飛び乗り　タイヤを鳴らして大通りに消えた

会社に到着するや　企画課長の石井と編集課長の栗原に自信たっぷりの企画をぶつけた

革新的な石井は興味を持ったのか

碧の熱のこもった　企画説明に二度三度うなずきながら聴いているが　保守的で

碧の直属の上司にあたる　栗原の表情は　いつも通り渋い・・・

「碧ちゃん　なかなかイイんじゃない・・・うんうん　イケるかも」と石井

「でも　若杉君　上が何って言うか？一般視聴者の支持も得られるか」と栗原

「主婦や老人向けの番組　多いからあ加入者が伸びないんですよ　お　もつと違う・・・

例えば若い女の子やオヤジ達にもバシッって伝わるパンチみたいな
ア」

石井は身振り手振りを交えて必死に説明する碧に笑いがこみ上げてきた

企画がお粗末に感じられたのではない　むしろ「報道とは？」を誰より真剣に考え続けた碧の企画が当たりそうな予感がして　自然と頬が緩んだのだ

報道の差別化によって活路を見出す・・・

「でも再検証とか深掘りなんか時間やスタッフの余裕　そう予算が

ネック」

まだ渋っている栗原に ニコニコ顔の碧は平然と続ける

「アタシやります 最悪 一人でも 伝える側が納得しないニユー
スなんてえ受ける側だって納得しないって思うしいゝ このままだ
とお会社やバイしい」

新企画プレゼンまでの 時間的猶予はなくなってきた 石井も
栗原も正直起死回生の企画をまとめあげられないでいたこともあつ
て 碧の企画を骨子に上層部への

「新企画」として本格作成することになった

早速 製作部内部にプロジェクトチームが結成された といつても
両課長に碧を加えた3人のチームだ

碧的には ある意味 高校の文化祭気分で 自由奔放な発想だが予
算や期間の認識に甘さがあり それを石井 栗原の両課長が現実的
に修正を加え 上にも納得してもらえるプレゼン資料にしていく役
割だ

2人には 人生一代の大勝負といった張り詰めた緊張感が漂う中
時々 碧のノー天気な声が響く そんな 対照的な空気の中でプロ
ジェクトは 始動していた

1章 4 試行錯誤

碧が発案し企画課長の石井と編集課長の栗原が修正を加えた企画書は企画会議で何とか上層部に承認され新報道プロジェクトとしてスタートした

一度報道されたニュースを再検証して 切り口鋭く掘り下げて 解りやすく伝える

視聴者の知りたいニュースに的を絞り 徹底的に調べ直し伝える・・・

会議での承認と言えば聞こえはいいが 元々新企画など期待していない上層部

にとって どんな企画でも承認してしまう空気が漂っているの結果だった

当然と言えば当然だが

今回 碧は企画会議に呼ばれなかった 前回のような爆弾発言をされては

通る企画も通らなくなるのが明白だったから 会議当日 大して必要もない 取材を押し付けられ

碧は出席できなくなった・・・

見事なまでの栗原の策略だった

その策略が功を奏し 製作部として会議は無難に乗り切れた・・・

そして もうひとつのサプライズが碧の知らない水面下で企画書に盛り込まれ

企画会議で新報道企画に加え 上層部に同時承認されていた・・・

企画課長の石井と編集課長の栗原の極秘サプライズ企画

「ニュースキャスター 若杉 碧」の起用だ 当然 当人に内緒なのは言うまでもない

アナウンス経験もなく標準語の発声も語学力も危なっかしいのは社内では有名だ

ただ 負けず嫌いなのは 誰もが認め 最大の武器になるのも また確かのような

企画承認後 栗原が その説得にあたったが

本人は いきなりキャスターをこなす自信なんかないから大変だ
結局「上が決めたコトだから・・・」と嘘混じりの決り文句で片付けられてしまった・・・

弱気の栗原としては これが精一杯の説得工作になる

碧も「キャスターも含め 企画全体が会社承認の条件」という殺し文句に折れた形で

キャスターを渋々引き受けたものの 取材リポートをしながら 憂鬱な日々を送っていた

第1回の収録まで あと2日しかない 碧は人知れず焦りを感じ始めた・・・

取材資料は確実に増えていくが それをどう整理してキャスターの口語調文章に作り変えるか・・・レポート用紙を前に眠れぬ夜は続く・・・

悩んだ碧は一裕に携帯していた

新企画立ち上げまでの経緯と 第1回放送予定のマンション強盗事件を伝え

「ねえ マンションの樋^とつてえ どうすれば登れなくなるの？」

「普通 屋根ひさしとかバルコニーから落としたタテ樋はエルボって呼ばれる曲げパイプで外壁方向に曲げて固定して垂直に落とすんだよ だからさあ屋根ひさし とかバルコニー先端から樋を垂直に落とせば 樋が外壁から離れて足を掛けながら登るのが難しくなるし 外壁から離すことで固定強度も落ちて樋がグラグラするから登れないはず お金掛けずに効果満点さ」

「えーっ ホントにい ホントお??」

「それを検証して 解りやすく伝えるんだろ? 碧自身が・・・だよなっ?」

早速 製作スタッフとホームセンターで樋や金物を入手し 会社の1階外壁で実験してみる 実際使用している樋の横に外壁から離れた樋を金物で固定して両方を比較できるようにした

「結果だけをアナウンスするだけじゃ視聴者に解りやすく伝わらない」

碧の主張から 若い男性スタッフを実際に 通常の樋と実験用の樋に登らせた

そして その両方の樋を登る様子を映像として保存した・・・

検証結果は明白だった 外壁に固定した方は簡単に登れるが 外壁

から離れた方は樋が左右に振れる不安定さに加え 外壁に遠いため
足が壁に掛けられない

その映像を放送で使用するかどうかは 番組編成ミーティングで決
まるのだが その場にいたスタッフは こんな簡単なコトで効果が
あるなんて?・・・と一様

に驚いている様子だ 碧が叫ぶ「コレ!すんごい解りやすっ!」

碧的には この映像で 第1回目の放映に勝負を賭けるハラは固ま
っていた

時間が無い 機材を片付けると 石井 栗原を交えた番組編成ミ
ーティングに入る

石井企画課長は営業部 特に予算やスポンサーに対する配慮から番
組を見る 編集課長の栗原は番組全体の絵的部分 タイムキープや
フレーム割り キャスターの台詞なんかに注意を払いながらのミ
ーティングとなる・・・

キメ細かい取材を地道に重ねた碧の発言は具体的に説得力に満ち他
のスタッフ を圧倒し 新企画に賭ける碧ペースで進められた

碧の仕事は それだけではなかった・・・

ニュースキャスターもやらされる羽目になっていたからだ

ニュース原稿は栗原が碧の取材をもとに書き上げたが カメラ目線
をしながら原稿は読めない おおそのストーリーは碧が理解して
いるのだから流れる的な心配こそないが アナウンサー独特の言い回
しに自信がなく ここ何日も人知れず 鏡に向かって原稿読み練習
をしているのだが 不安が先に立つ・・・

栗原の「視聴者目線の疑問に応えるんだからシロウトっぽくてイイよ」の言葉に幾分 救われてはいるが カメラの反対側にいる多くの視聴者を意識するにつれ緊張のボルテージは日増しに高まるばかりで「逃げ出したい・・・」が本音だ

全スタッフに台本が手渡されたのは録画撮り前日だった

通常ニュース番組は生放送が原則だが 一般報道されたニュースを検証するニュース番組としての位置付けだったから

録画放送形式が採用された 生放送はリスクがある
特に今回はアナウンサー経験のない19歳 碧がキャスターを務めるからだ

完成した番組を 事前にスポンサーに見てもらい了解を得ておかないと社内で営業部の集中攻撃を受ける・・・

『真相報道 切り口』

碧が最後まで主張した「切り口」を前面に押し出し 栗原が上層部の了解を取り付け決定した番組タイトルだ 次の報道内容は すでに放送されたニュースを検証する性格上 先行ニュースの内容次第となる

いつ番組打ち切りになるか 誰にも予見できない見切り発車的な番組・・・

録画撮り当日・・・碧は落ち着かなかった

そして 本番直前 一裕に電話をしていた

「おとん！自信ないよぉ〜 どうしよっ」声が強張っている
「企画練ってる時とか 取材なんか 伝えたくてワクワクしたろっ

？」

「う・うん・・・」

「だったら そのワクワクを 楽しく伝えればイイやん 楽しめ！」
「そ・そっか・・・そだねっ！」

小さなスタジオは20人ほどのスタッフが右に左に忙しく準備作業をしている全体的に暗くガランとした天井の高い大空間に フロア―から1段高くなって眩しくスポットライトに照らし出されている空間がある

碧の仕事場 そして勝負の場 キャスター席だ

タイムキーパーのカウントダウンとは逆に 不思議と碧の心臓の鼓動は落ち着いていく・・・

一裕の「楽しめ！」の一言がそうさせていた そして

撮り直しができる録画だったのと企画を進めていた時の視聴者感覚を思い出し肩の力が抜けたことで 番組撮りは意外なほど スツと無難に終えた・・・

この番組が放映されるのは 毎週月曜日 午後8時

碧が主張した主婦層 老人層からの脱却のため あえてゴールデンにぶつけた

録画だったこともあり 製作に関わったスタッフが自宅で放送を見た

スタジオでの製作過程チェックで 当然映像確認しているのだが 「視聴者の目として全員自宅で見よう」石井の提案によるものだ

ただ一人 キャスター碧は 寝不足だったこともあり その時間自宅で

爆睡してしまい 見逃していた……

放送翌日の午後

総務部長が製作部に入室し

「製作さん やったじゃないか 真相報道の反響が凄いぞ」

製作サイドは その意味を計り知れないのか まばらの視線を戻す

「イイ番組 解りやすい 新鮮だ・・そんな反響電話が鳴り続けるよ」

総務部長は 相当ご機嫌の様子だ おそらくスポンサーの反応も上々なのだろう

製作スタッフ 一人一人の肩を大袈裟に叩きながら 満面の笑みを飛ばしている

碧は当然のこと 石井も 表情が緩んだ

「イイ感じの滑り出しだねっ 碧ちゃん」石井の声が弾んでいる

同じ製作スタッフの「ひろみ」が碧に駆け寄り

「みど〱やったネ！ 頑張ってきたもんね〱」相当感激しているのか 碧の手を握り うっすらと目を潤ませている

碧と ひろみは年齢が近いこともあって 仲が良かった お互いに

アドバイスしあい

励ましあい……

時には議論が嵩じて 一触即発の険悪な時期もあった

萎えそうな時期もあった・・・投げ出したい時も・・・
それら乗り越え ようやく放映までたどり着き それなりの感觸
を得た

それも これも彼女の存在抜きでは語れない事を誰よりも
碧自身が強く感じていたし 感謝もしていた・・・

人前で涙を見せない 気丈な碧も 今日間違った・・・
一緒に作り上げてきたスタッフ全員の拍手が製作室に響き渡った

「でも油断しないで 慎重に行こう」栗原は 何かを感じとったの
か

言葉を選び 真顔でつぶやいた・・・

放送から2日経過・・・

そして 栗原のイヤな予感的中する・・・

1章 5 挫折

その電話は 山根綾香が勤める信用金庫の上司からだった

綾香は マンション強盗事件の被害者で 今回の放送でも音声を変えて

声の出演をし 事件のキーワードとなったバルコニーの撮影にも応じてくれた

言わば 番組構成に無くてはならない重要な役割を果たした女性だ

視聴者コールセンターの電話を 栗原につないだのは ひろみだ
「番組製作の責任者と話したい・・・」

ひろみの「課長 外線です」 只ならぬ 強張った声と表情を読み取り

桑原は 音も無く 応接室に向かい ドア表示を

空室から使用中に素早くスライドさせ ドアの向こうに消えた

今日の制作室は 取材外出が多く 怖いくらい静まり返っている

ひろみにとって ドアが閉まってからの時間が やけに永く感じられた

電話の外線ランプは赤く点灯し 通話が未だ継続していることを示し
他の仕事に掛かりたいはずの ひろみの思考を混濁させている・・・

応接室のドアが開く音 視線を電話機に落とすと外線ランプは消え
それに取って代わるように 栗原の やや憔悴した いつもの顔が
視線の端に入ってきた 応接室のドアを半分開いた状態で

「若杉くんって まだ取材かな？」

「はい・・・帰社時間の予定は・・・」

ひろみは制作室出入口の壁に掲げられた 出先ボードに目をやる

「帰社したら ここに呼んで」ひろみの言葉を さえぎり栗原は
うつむいたまま またドアの向こうに・・・

それから時間にして15分程 壁に掛かる時計から発する秒針の音が
こんなに ハッキリ響いているのに 今日初めて 気づいた

静かだ・・・ 自らの胸の波立ちと対照的だ・・・

経験したことの無い 閉塞した時間が ひろみの中で流れ
絵コンテのフレーム割りから先 手が止まったまま まったく進ま
ない

「ただいまあゝ」場にそぐわないノー天気な声 碧の声だ・・・

取材 撮影クルーも引き連れて 製作に喧騒が帰る

「なゝで新聞記者って独りで しゃべるかなア 黙ってれって！」
「もおうっぜー 警察キライ！ 犯人より刑事の人相ワルいしい！」
自分の席に着くなり 取材メモを忙しそうに整理しながら 独り言
が多い

ひろみは 何をどう伝えていいのか苦慮していた

「栗原課長が応接室で待つてる」そう 単純過ぎるメッセージ

碧が傷付かないような 言葉を選びたかった・・・
でも 電話の中身が掴めていない 知ったかぶりも無責任で偽善者に映る

碧は相変わらずブツブツ言いながら資料整理とコメント入れしている

「若杉くん チョットこつち」

杉原が左手をドアノブに乗せたまま 右手で大きく手招きしている
製作に戻った喧騒に 応接室の栗原が気づいたのだらう

「何だろっ忙しいのにい」席を立つ碧から ひろみは視線を外した

そして またイヤな時間を味わうことになる・・・

絵コンテが ワンフレーム完成した時だった

応接室から碧が慌ただしく出てきた

栗原が後に続いてドアのところで何か声をかけているが

碧は振り向く素振りも見せず

ひたすら自分のデスクを目指す・・・

メモを持つ右手を頬の辺りに添えて 顔を隠したいのか
涙をぬぐっているのか・・・

ひろみは慌てて絵コンテに視線を戻し 碧が席に戻るのを待った

席に戻った碧は 取材資料を乱暴に事件別ファイルに突っ込んでいる
荒れている様子は誰の目にも明らかだ

「ねえ みど」・・・「ねえ」・・・

無言だ・・・

向かい合った2人のデスクには資料が山と積まれ
いつ　なだれが発生しても不思議ではない状態だった

その資料の山に唯一の隙間　らしき空間があり　仕事の打ち合わせ
などに身体をスライドさせ顔を覗かせて会話をしていた　普段はそ
うだった

ひろみは身体を　よじらせて　その隙間から碧に再度声をかけた
「ねえ　みど　何かあったの・・・」今度は少し甘え口調にした

下をむいたまま　資料の整理をしているからか
碧の表情を窺い知ることはできない・・・

数秒の沈黙が続いた　資料の擦れあう音と　メモ用紙を破る音に続
いて

「関係ないでしょ　ワタシの番組なんだから」

決して感情的な言葉ではなかった
むしろ冷静に　感情を押し殺しているかに聞き取れた

ひろみは我が耳を疑った・・・　続く言葉が思い当たらない・・・
番組制作の悲喜こもごもを　それぞれの胸に
熱い思いで　一つ一つ　一緒に積み上げてきたはずだったのに・・・

初回放送後　感極まって握り合った手の温もりが遠のいていく・・・

何かの間違い・・・言葉の中身に否定できる要素を模索した・・・

しかし碧はハッキリと「ワタシの番組」と言った

突きつけられた 残酷で 紛れもなく そう・・・変えようのない事実

定まらない視線のまま 見詰める絵コンテに 頬を伝った一筋の涙
が落ちた

碧は 無言のまま制作室に重苦しい空気を残し 飛び出していった

応接室から今度は ひろみに向けて 手招きが飛んだ

よどんだ視界の中 栗原は山盛りになった灰皿にタバコを押し付けていた

栗原は慎重派として通っている 穿った見方をすれば 臆病者ともいえる

身体を反らして 次のタバコを せわしく探しはじめた

「何があつたんですか」ドアを閉めるのに合わせて問いかける

「ああ 若杉君と仲が良さそうだから話しておこうか」と椅子に座るように促す

「実は・・・」

ひろみを取り次いだ電話の内容から入った

電話は 取材協力してくれた 山根綾香が勤める信用金庫の上司か

らだった

それによると 報道された翌日 興味本位の信金の先輩OL「明恵」が

「あれって アナタのマンションでしょ？」とカマをかけてきたらしい

会社ではベテラン社員として不動の地位を得ていて 多くの情報が集まる

女子社員全体の派閥の領袖的存在で 敵に廻すと かなり危険な古参OLだ

強盗事件のことは直属の上司と支店長しか知らないはずだ 完全に否定すれば何の問題もなかった・・・

しかし内向的な性格もあってハッキリと モノを言うのが苦手な綾香は

「いえ・・・」中途半端に そう答えたものの 表情に迷いが出た・・・

それを古参OLの明恵が見逃すはずはなかった・・・

女子社員しか出席資格のない給湯室会議で情報は さらに加工される

どこの会社でも同じだが 上司の陰口や若手社員の品評はこの給湯室から発信されるものと相場は決まっている

ランチタイムまでに殆どの若手社員の間を情報は駆け巡り 面白半分の憶測からか事実は捻じ曲げられて伝達されていた・・・

明恵を含め はじめから事実を掌握している者は存在しないのだ

多くの若手社員は話半分で聞き流し あえて本人に問い正す事はしなかったが

どこの会社にも ノリの軽い無神経な若手社員は存在するもので

「ねえ聞いたよお 大変だったネ」ランチタイムの社員食堂で
その代表選手のような「浅尾」が声をかけてきた

いつもヘラヘラしていることから「ヘラ朝」と上司から揶揄されている

どこまで情報を握られているのか 綾香は見当もつかない・・・

「マジ怖いよねっ 何もされてないっしょ？」

「何もって・・・」社員食堂全体の好奇の視線を代弁している
ようだ

感情を揺り動かす見えない存在に怯え 心臓の鼓動が にわかに高
まる・・・

普段の聡明で冷静な綾香の姿は ここにはない・・・
拷問にも似た 首筋に突き刺さる悪意に満ち溢れた視線・・・

「ガシヤ」突然立ち上がると 華奢な身体を揺らし逃げるように走
り去る綾香

倒れたままの丸スツールと まだ熱いスープを残して・・・

その足でロッカー室へ駆け込み 内側からドアに額を押し当てて泣
き崩れた

力なく 私服に着替えると人目避けるように 裏口へ向かう・・・

・

信用金庫の周囲には政治家への不正融資事件以降

マスコミが取材のために張っていることが多く ちょうど社員通用口から

そつと出る 綾香にもマイクが向けられた

意気消沈している綾香には「やめてください」の言葉さえ搾り出す
気力も

消え失せていた ただただうつむいて その場を立ち去る力が残さ
れているだけだ

しつこく追ってくるハイエナマイクに 自分へ向けられ そして増
幅された

社内の心無い誹謗中傷と好奇に満ちた視線が重なり 押し潰されそ
うだ・・・

華奢な身体に纏わりつく孤独と絶望・・・そんな重圧に支配された
とめどなく溢れる涙を拭うことも忘れて 帰路についた

翌日 品行方正を通していた 山根綾香は何の連絡もなく会社を欠
勤していた・・・

1章6 確かな手応え

6 確かな手応え

『マンション連続強盗逮捕!』 『犯行は同一単独犯!』
衝撃的なニュースが北都秋田を駆け巡った

CAT「真相報道 切り口」取材チームも他社に遅れをとる訳には
いかない

第一報と同時に秋田警察城西署へ向けて取材車両に機材を積み込むが
テンションがイマイチ・・・

そう トラブルメーカー いや ムードメーカー 若杉碧の姿がな
いのだ

山根綾香の一件で 無断欠勤の「病気」が再発し 携帯もつながら
ない・・・

碧の穴を埋めたのは 同僚で親友だった ひろみ・・・

「くだった」すでに過去形となっている

「ワタシの番組」発言に端を発した ひろみとの溝 それが
チーム全体の不協和音へと連鎖し 責任者の栗原にとっては
憂慮すべき問題になりつつあった

秋田城西署は秋田中央道路の地下トンネル開通より一足先に
新庁舎が竣工し すでに広小路の新しい顔としてスタートを切って
いた

旧庁舎の頃 1階の一番奥 薄暗い廊下の突き当たりに位置していた
旧記者室はメインエントランスに隣接した 総ガラス張りの明るく
モダンな

プレスルームと名称を昇格させ CAT取材チームを迎えた

スペースも格段に広くなっていた これによつて

マスコミ各社が競って場所取りをする必要もなくなり ほぼ同じ条
件で

代表質問や撮影ができるため マスコミサイドには 概ね好評のよ
うだ

共同記者会見の準備をしていた制服警察官が CAT取材チームの
腕章を

見掛けて近づき「あんれっ 今日〴〵みどりちゃん 来ていねっすか」

「ええ ちよつと他の仕事 入って・・・」と 愛想笑いの ひろみ

ひろみは直感的に あの頼りなさげで 一見出世とは無縁の警察官が
碧のニュースソース 石川・・・つまり信憑性の高い情報の提供者・
・

ひろみも番組構成上 取材内容をまとめる 補助をするのだが

碧が持ち込む情報は 前回の連続強盗事件だけに留まらず

他社がスッパ抜くことのない 事件の核心に触れる 1級ネタが多い

取材する側としては そのニュースソースの 引き出しが多いほど
他社 そして社内でのライバルに差をつける 強力な武器になるの
は確かだ

碧のそれは 掛け値なしで 他を圧倒している

今 ひろみは 碧に対して沸き起こる嫉妬に似た思いを 目の前で

要領悪く 会場設営に右往左往している警察官に向けている

定刻通りに共同記者会見は始まった

上座の長机に3人 そして卓上にやや大きめのネームプレートが置いてある

中央に刑事課長 右に地域課長 左に生活安全課長が着席 それぞれにマイクがセッティングされている

一般的な地域主要警察署の場合 強盗などの強行事犯に対し捜査し逮捕するのは刑事課の任務となる

よって この記者会見を仕切るのも刑事課だ

「ええ」 今般の連続マンション浸入強盗事犯の詳細をお話します」
形通りの前振りに続き 逮捕された容疑者の住所 職業 氏名 年齢

そして その他 取調べの済んでいる 関連事件の数と詳細……

内容としては事前に掴んでいる情報から 目新しいモノはない……
警察サイドが強調したのは 城西署地域課が作成し配布した防犯チラシの効果と

容疑者が犯行場所を変えると読んで 警戒エリアを駅西に移しそこで

容疑者を逮捕した ことぐらいだ

一通りの警察発表が終わると 今度はマスコミ側からの代表質問に移った

各社が一斉に しかも同じ内容の質問をしたのでは 時間のロスもあり

警察サイドの回答も準備不足になるケースが考えられるため

今回 警察とマスコミ の間で事前調整があり代表質問形式となっていた

事前調整は各社の情報力 資本力など 力関係が表われる場でもある・・・

しかしCAT取材チームは あえて事前調整で発言を控えた

今回の事件で CATは他社を圧倒する情報量と その信憑性に 絶対的な自信があったからだ・・・

相手に自分のカードを見せることなく 記者会見を終了させ そして

秘密裏に水面下で進め そのカードをトップ記事として切る

その記事が配信された瞬間 他社は完膚なきまでに叩きのめされる 筋書きだ

逆の方法もある 代表質問で事前調整に隠しておいた爆弾ネタを ぶつけ

警察や他社のド肝を抜く 「。。。社ですが・・・」と会社名を大々的に

アピールする映像を他社が使わざるを得ない状況に追い込む方法だ

そう・・・事前調整と共同記者会見は ハラの探り合いの場 更に言うなら

ドロドロした野心と憎悪が渦巻く醜い 主戦場でもあるのだ・・・

事前調整通り 大手の新聞社と放送局が台本棒読みの質問を淡々と こなす

淡い期待を寄せた爆弾質問も 白熱した質疑応答さえもなく 記者
会見は終了

碧が情熱を傾け 丹念に足で稼ぎ 取材した膨大な資料を会社の
ファイル保管庫に温存させ 会見会場で 何一つ書き足さなかった
殆ど

白紙の取材メモに目をやりながら ひろみは 密かに ほくそ笑ん
だ・・・

会見会場を飛び出したCATチームは ひろみの提案で少人数に分
かれ

取材先に向かう

正確な表現をするなら 蓄積された 事件の取材ファイル
「碧りポート」のウラをとる作業の取材・・・

ひろみが初めて そのファイルを目にした時 大きな衝撃を覚えた
情報量が ケタ外れに多く 「ここが知りたい！」を確実に押さえ
ている

表面上の取材に終わっていない 自分のいだいた「なんでだろう？」
を

徹底的に深掘りして 妥協のない内容に仕上がっている

走り書きの日時からすると いったい いつ睡眠を摂っているのか？

驚きと同時に 碧の持つ底知れぬ強さを 同僚として脅威に感じた

警察発表では「警察が作成したチラシ」の効果を強調していた

チラシとはマンションの樋を改修することで効果が上がることをイ
ラストで

説明してあり 費用も それほど掛からないことが書かれている・・・

・と

しかし 碧の取材レポートには 手書きで こう記してあった

『 マンション雨トイの改良案 おとん相談 ↓ 改良のチラシ作る

↓ ケーサツ持つてく 石プー相談 ↓ ダメなら みどが作る
↓ 城東の辺とか石プーと配る ↓ ダメなら1人で配る 』

「これ 誰？ おとん？ に 石プー？ って・・・」ひろみは首をかしげる

しかし チラシは碧が発案し警察に働き掛けたことがうかがえる

次のページには

『 城東マンション説明おわりい ↓ 石プーと中通りに移動だあ
↓ 町内会長に会うぞ ↓ 説明だ ↓ 夕方の見回りも頼もつかな？

↓ 町内会で配ってもらう予定 ↓ マンションオーナーにも配る 』

中通りは今回 容疑者が逮捕されたエリアだ

「何で 町内会長なんだろ？」ひろみには理解できない

ひろみは一足先に帰社して 制作室でフレーム割りをしていた

続々と取材チームが戻り 製作室が喧騒に包まれる

企画の石井課長と編集の栗原課長が揃ったタイミングで取材後ミーティングが

開かれ 各自取材資料を手に 慌ただしく応接室へ向かう

全スタッフが着席すると同時に 石井が 警察担当取材チームの報告を求める

チラシの作成は碧が発案し警察の生活安全課と地域課に粘り強く働き掛けて実施され 城東エリアを一巡した後 中通りエリアに活動を広げていたのだと言う

中通りエリアは駅に隣接する一等地で 早くから商業地を形成していた

急激な都市化が進行したため 地域内で近隣同士のつながりが希薄となった

「だから町内会長にまとめてもらわないと前に進まない」と提案したのも 碧だった・・・

チラシは城東署が渋々 従った形となり 結果的に町内会を動かした「犯人は明るいうちに 下見してるはず」これも碧の読みだ

近隣の関係が希薄でも 町内会長は おおよその家族構成と顔は一致する

夕方になると犬の散歩姿での 警戒協力の矢先だった

町内会長の正に直感だった 訪問者としてはマンション名がハッキリしている

のに エントランスではなくバルコニー側から上階を伺う不審な男に遭遇

声を掛けたところ 走り去ったため 同じくこのエリアで警戒に当たっていた

警察官 そして町内会長の大声でとっさに外に飛び出した多くの住民に

挟み撃ちにされた

完全包囲に観念したのか 職務質問を受けた後 ポケットから出た軍手やペンチの説明がつかず あっさり署に連行されてしまった

逮捕された容疑者の自供によると 城東エリアで次の獲物を物色したが

殆どのマンションで樋の改良工事が進んでいて 駅の反対側にターゲットを移し

慣れないエリアで物件の下見をしている矢先に身柄確保されたいのだ

以上が城西署生活安全課の石川から聞き出した情報らしい・・・

企画課の石井課長が移動式ホワイトボードにキュッキュと走り書きする

1 チラシの内容と効果の検証

2 犯人が犯行場所を変えた理由

3 市民と警察の連携による成功例

「今回の構成は ざっと こんな感じで どうか？ 栗原課長」

「ですねー 今回はそんな感じで 行きましようか」と栗原

いつもなら 碧が異論を唱える流れだが 今回は ひろみも同調している

いや 碧が築き上げた仕事に異論を唱える余地など あるはずがない

放映までの時間がないことから 「キャスター碧」の代役は ひろ

みが務める

ことに決まった

ひろみにとっては やっと自分の実力を示せるチャンスが巡ってきた訳だから

にわかに胸が高まった・・・と同時に自分にそんな大役がこなせるのか？

例えばようないプレッシャーが やや遅れて襲ってきた

全身の血の気がスツと引いていく感覚を初めて体感した瞬間だった・

・

2日後に迫った録画撮りに合わせ 至急 番組台本の下書きを作り上げるよう

代役キャスター ひろみと映像チームに指示がありミーティングは終了した

冷え切った身体のまま ひろみはフレーム割りに アナウンスを乗せての

タイム計測を 焦りながら何度も何度も繰り返した・・・

本番は2日後だ・・・

1章 7 指定席へ

7 指定席へ

収録日を 間近に控え 制作室は張り詰めた緊張感と言いつのまない焦りに包まれていた

何とかなるだろうといった安易な気持ちからキャスターを引き受けたものの

上々の滑り出しを見せた番組の評価を落とせないプレッシャーからかひろみの表情は強張る一方だ

台本にあるキャスターコメントと映像が巧く噛み合わない・・
自分が発している言葉になっていないのだ 改めて「碧の番組」なのだと

理屈でなく感覚的に思い知らされる

編集室に詰めて もう一度 初回放送したVTRをモニターで確認し今回との違いを確認してみる・・「何かが違うはず・・・・・」
・・・

2回3回・・検証を続け 不確かながら 微かに見えてきたものがあつた

それは 碧の言葉と瞳の輝きに芯のしつかりした 伝えたい情熱と着実に積み上げ 取材に裏付けされた自信が・・・・

そして関係する誰もが惜しめないバックアップをしてしまう「人としての魅力」

みどりポートにも たびたび登場する城西署の石川や北都新報の佐竹に代表されるように 碧を不自然な形でなく 普通に支えている
また 仕事でのつながりが皆無な城東町内会やその近隣町内会へ
手をつないで体温を伝えるように 根気よく輪を広げていく様が時
系列で克明に記され

最初は面倒くさいとか関わりたくないとい顔をしなかった町内会
を次第に
巻き込み 本来広げようともくろんだ防犯活動は それだけに と
どまらず
交流が希薄だった町内の住民同士が 積極的に挨拶を交わすようになり
顔見知りが増え 結果 笑顔の輪が広がる副産物を もたらした

碧を知れば知るほど 自分との差を感じずにはいられない
自分に対し惜しめないエールを送ってくれる人が いったい何人いるのか？

そう考えると 醜く歪んだ自分の野心に嫌悪感を覚えた
このまま 何食わぬ顔でスポットライトの前に立てるのか？・・・

外界から完全に遮断され 怖いくらい音を吸収する編集室
絶対聞こえるはずのない秒針の音が重く 鼓膜に反響しながら
萎えきった ひろみの胸を 痛いくらいに揺さぶる

両課長から出された 「ダメ出し」で真っ赤になった台本案に
修正を加える手が止まった

ぶ厚い2重ガラスで隔てられた編集室とつながった

音響調整ミキシングブース越しに スタッフの動きが慌しくなったようだ 数人のスタッフが周囲を探すように首を素早く動かしたり指を差したり 大きなジェスチャーで耳元に親指と小指を伸ばしたこぶしを持っていき せわしくスナップさせている

外線電話のようだ 通常 リハーサルに外線取次ぎはされない番組に影響する新たなニュースの場合に限られるのだ

全スタッフの手が止まり 足早に防音扉に向かう栗原の後姿を目で追う

落ち着きのない時間が流れ 探るようなスタッフの視線の中へ普段通りの表情を湛えた栗原が戻ってきた

スタッフへの召集をかける前に 空気を察した側が 栗原の前後左右から

集まってきた 日時がビッシリ走り書きされたホワイトボード前が

栗原の指定席 ここで緊急現場ミーティングが行われる

「初回放送で取材協力してくれた山根さんからの電話でした・・・」
全スタッフが揃ったのを確認した栗原が電話の概要を語る

山根綾香は放送の翌日から好奇の目にさらされ精神的に耐えられなくなる

頼れる人がいないこともあって 傷心し実家に身を寄せていた

取材協力したことを後悔し 特に碧に対する不信の念は強かったよ
うだ

その碧が 綾香の実家を訪れた・・綾香が無断欠勤した翌日のことだ
碧はCATを飛び出した後 山根綾香の勤める信用金庫を訪問して
綾香と最も親しくしている同僚で 借りているマンションも近い
「斉藤香奈」を訪ね当てた 報道によつて傷付いた同僚に
香奈も どう対応していいのか計りかねていた矢先

その混乱が收拾もつかないうちに 今度は その報道側からの訪問
当然 色好い返事はもらえない・・が 今回の責任は自分にあり
何が何でも自分で謝罪し理解してもらいたい・・・・・
粘つて 実家が秋田「森岳」「じゅんさい農家」そこまで聞き出した

森岳は秋田駅からJR奥羽線で北へ1時間ほど行ったところだ
森岳近くの商店で「じゅんさい 作つてる山根さん」で通じた

じゅんさい農家は減少の一途らしい 「ジュンサイ」とは
澄んだ淡水に育成する スイレンに似た植物で 又メリ気のある若
芽を

食用とする この地方独特の特産品だ

駅近くから のどかな田園風景 緑豊かな田舎の集落といった道を
南東に向かう
遠くに電車のレール刻みの音が やがて木工所の電動丸ノコ盤の音に
重なり 犬の鳴き声も加わる

古く小さな農家作りの家 「山根家」は風景に溶け込んでいた

最も許せない相手に対して会う理由もなく 対応した母親から一方的に

門前払いされた形となった その時に娘 綾香からの言葉を借り

「他人のプライバシーを売り物にして 楽しんでる最低の仕事！」

そう 大上段に言い放たれた・・・

仕事に誇りを持ち信念と情熱を注いできた 碧にとっては聞くに耐えない

罵詈雑言だったに違いない

いつもの碧なら その言葉によって完膚なきまでに叩きのめされ立ち直るまでに相当な時間を要していただろう しかし

今回は違った 自分で蒔いた種 自分で育てた苗 自分で収穫した果実だ

愛着がある ここで挫折したら 自分が信じ 賭けてきたものが音を立てて崩れ去ることになる・・・

「相手が納得するまで 何度でも会う！」そう決めていた

翌日も 森岳に碧の姿があり 山根の実家に向かうも また無言の門前払いに遭い 碧のマインドは萎えかけていた・・・

そして 次の夜のこと 信用金庫の同僚 斉藤香奈から実家に身を寄せている

山根綾香に1本の電話が入った

私服刑事が2人やってきて このマンションに被害がないか確認しにきたのだ

連続強盗の被疑者が逮捕された夜に・・・

警察は逮捕した被疑者を取り調べで
犯行状況の詳細と実況見分を実施し　さらに別件容疑に関わってい
るか

余罪を追及　そしてウラをとるのだが

その取調べの過程で　綾香のマンションで犯行に及んだ後　そこか
ら近い

香奈の住むマンションにも目をつけていたのだという

4階の端部屋でメイン道路から1番奥の部屋　つまり香奈の部屋を
ターゲットに

していたのだと言う・・・にわかに信じ難い警察の言葉

刑事は何かコピーの綴りみたいなものを片手に1階バルコニーに移
動し寸法を測り

転記しているようだ　写真も撮っている

2階3階の住民にも説明し　最後に香奈の部屋にも再び訪れて　こ
う言った

「やはり　犯人は自供通り樋から登ろうと体重を掛けた途端に固定
金物が

折れ　未遂に終わってますね　いやぁ無事で良かった」

警察が去っていった後　独り残された部屋で　立っているのが精一
杯だった
襲ってくる恐怖で背筋が冷たくなる・・・

「あの事件後　すぐに樋を改修してもらってなかったら・・・」

恐怖も手伝って　急いで　綾香の実家の電話番号を調べて掛けてき

ただ

今すぐ綾香にお礼を言いたい

「あなたの勇気で 私が そして多くの人が被害に遭わなくて済んだ」と

綾香は香奈の感謝の気持ちを素直に聞けずにいた 違う！ワタシじゃない

感謝されるのは 信念を貫き通した「若杉 碧」だと・・・

・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・

綾香からの電話の内容を伝えた栗原の声は興奮気味に弾んでいた
そして 最後にこう結んだ・・・「山根綾香さんから こう言われま
した」

「今回 真実を伝える大切さが解りました 簡単なようで勇気も必
要だと

・・・これからもし番組作ってください 応援してます」

スタッフの中から 安堵のため息が起こり 目に鋭気がみなぎって
いる

いい仕事がしたいと 心が1つに繋がっているのが分かる

と同時に「何か物足りなさ」も共有して感じ取っていた・・・その
場にいた

全スタッフの思い・・・

台本とリポートファイルを乱暴に驚掴みにし「ワタシ探してきます

！！」

真つ先に席を立ち 重い防音扉に向かう後姿 「ひろみ」だ
他人に負けたくない 自分もスポット浴びたい・・・そんな気負いや
尖った対抗心は その後姿から消え イイ番組作りに自分の出来る
ことを

正面から取り組む 純粋なスタッフの後姿だった

地下道工事の仮設シートパイルと大型クレーンが撤去され 堀の姿
が

元通りになった千秋公園前 広小路通りを秋田駅に向けて
足早に歩きながらファイルをめくった

先程の栗原の電話報告だと 今日碧は森岳に行っているはずだ

急いで奥羽本線に乗り込み 秋田駅から北へ・・・

車窓からは見慣れた田園地帯が続く 1時間がこんなに短く感じる
とは

意外で 何と切り出しているのか考えがまとまる前に森岳の駅に到
着していた

うつむき加減で電車を降りた ひろみの目に飛び込んできたのが・・・

碧だ・・・ホームのベンチに座り右手にタウンワークを筒状に丸めて
ベンチをトントン 軽く叩きながら 携帯を左手に誰かと会話中だ

そつと近づき 通話が終わるのを待つが静かな駅 碧の声は聞こえ
てしまう

「だからさあゝおとん もゝおダメかなゝって」

「うん でもお・・・」

「てかぁ ホント頑張ったんだよ、最後までえ」

「うん うん・・・」

「じゃ もう1回行ってみるよ」

携帯を切つて 深いため息をついた碧の視界に ひろみが入った

鳩が豆鉄砲をくらった・・・突然の出来事に遭遇し目を白黒させる

碧

「あつ・・・」次の言葉が探し出せない

「心配したんだよお」

「ゴ・ゴメン」

ひろみ は碧が手にしていたタウンワークをもぎ取るとベンチ横のゴミ箱に

華麗なシュートを決め 状況が飲み込めていない 碧の手を引っ張りベンチから立ち上がらせようと膝を少しだけ落とした

「待ってヨ」山根さんに会いに行かなきゃ」

「てかぁ それ 大丈夫だし」

「意味とか分かんないよ」

「後で話すからぁ、早く帰ろうよ てか 電車来るし」

綱引き状態で行ったり来たりしていた2人の手だったが 強引に引っ張り上げた

ひろみに軍配が上がる

反対ホームに秋田行きの普通電車が滑り込んだ直後 2人は最後尾のドアから

車内になだれ込んだ

息が整うタイミングを待ち 山根綾香の件を ひろみが順を追って

説明する

そして もう訪問する必要があることに安堵する碧だったが 2人の間に

横たわる 大きく深い「溝」が解決していない……そう……

「ワタシの番組」発言

碧から切り出す勇氣はなかった 冷静になればなるほど どれだけ自意識過剰で

自己中心的な発言……悔やんでも悔やみきれない失言……

周囲からは そう受け止められているに違いない……

しかし 碧の真意は若干違うところにあった

「自分の責任！」「自分で解決したい！」その「自分！」「自分！」が

前面に出過ぎた結果「ワタシ……」 発言につながったのだ

決して自分1人で番組を作り上げているといった勘違いや傲慢さから発せられたものではないのだ……

ひろみにしても その発言に反発し落胆もした……しかし時間の経過とともに

周囲の期待が自分に向き始めているのを快感として受け入れたこのままスポットを浴びたい 成功したい……そう強く願った

そして 自分で担当してみて お気楽に見えていただけの 碧の人間力に

打ちのめされた 人をひき付ける魅力に驚かされ 嫉妬もした

結果 自分の能力の限界とパーソナルの貧困さを思い知らされた……

今なら 素直に 心の底から「アナタの番組」と言える自分がいる
もどかしい時間は電車の振動とともに増幅され 駅1区間の沈黙を
作った
モノ言いたげな視線だけが 絡んでは外れ 外しては絡む の繰り返し
返し……

電車が「八郎潟」と表示された駅に 軋み音を響かせながらガゴツ
つと停止

「プシュー」とドアが開くタイミングに押された感じで「あのね！」
2人同時に発した声だ 少しハモったこともあり しばらく顔を見
合わせて

笑いをこらえた……

「プシュー」ドアが閉まるタイミングで 息が吹き出し2人笑いが
込み上げた
久し振りに笑った 大声で笑った 両手を身体の正面で大袈裟に叩
きながら

笑い過ぎなのか 熱い思いが一気に去来したのか定かではないが
2人とも涙目なのは間違いなく 涙を拭うのにも 時間を要した

2人を隔てる空気は八郎潟のホームに置き去りにし 幾分軽くなっ
た電車は

田園地帯を さらに南へ

ひろみは赤入れ訂正された台本を碧に手渡し 意見を聞く
企画課の石井が絞った3つのテーマの内 「市民と警察の連携」を
強調して
伝えたい……

「それが他の犯罪防止にもつながるし」碧は確信に満ちた瞳を飛ば

す

大テーマに記入された それぞれの中項目の下にVTR割りから逆算した

コメント秒数と大よそのコメント字数を計算し 碧に伝える

揺れる電車内で台本にセリフを書き込む碧・・・

もうすぐ追分駅だ 碧にとって 特別な「思い入れ」のある風景が車窓枠 左側に流れ やがて緑色の板金屋根が光る追分駅が車窓の右に映る

ひろみは携帯電話のストップウォッチ機能を利用して 碧のコメントを計測

追分駅を出る頃には 全コメントの通し計測が始まった

2人の集中力とコンビネーションは凄まじかった 「上飯島」「土崎」を通過

するまでにVTR割り以外の流れは ほぼ完璧に仕上げられていた

「課長のオツケーとか出るかなあ？」

「ぜんぜんオツケー てかアゝみどの番組なんだしい」とイタズラな瞳を返す

「もおゝゝ まだ言ってるしい」碧は頬を膨らませる

電車は定刻通り秋田駅に到着・・・ 時間がない！ 急いで飛び降りる

改札を通過する以外 2人の手は強く握られたままだ

強靱な絆と熱い信頼・・・

転んでも構わない・・・走る 走る

日本海の荒波と秋田の美しい山並みをモチーフにした波型屋根が印

象的な

秋田駅の象徴「ぼぼろーど」の大空間に2人の声がキヤーキヤー響き渡る

駅から広小路通りを西へ　そしてCATスタジオへ

勢いに任せ　いくつかのドアを通過し　最終の重いドア・・・

この前に来て急に立ち止まった碧は不安げな表情を　ひろみに投げ掛け

「ねえーひろ　みーんな　すごい怒ってるよねっ・・・・・・・・」

「許してくれるっかなあ・・・・・・・・」

「さーあ　わかんないよっ」ひろみは怖い表情を作り　同時に重い鉄の扉を

開き　立ちすくむ　碧の背中を強く押した　よろけるように押し出された

空間はかなり暗かった　外の明るさから　まだ目が慣れていないからだ

「パン」「パン」「パンパン」小さな風船を叩きつぶすような音・・・

・
「何？」視界が脆弱な分　音の正体がつかめない・・・

その音は次第に数を増し大空間に満ち鼓膜を刺激する

徐々に目が慣れてくる・・・その音はスタッフの拍手だった

1人・2人・・・3人・・・番組スタッフ全員が揃って　拍手している

「おかえり！」

「待ってたよ！」

「心配させやがって！」

それぞれの思いが痛いほど伝わり　嬉しい

スタッフで作られた輪の中央にはスポットライトで一際　浮かび上がった

キヤスター席が眩しく 碧の眼に飛び込む……
やがて目の前の眩しい映像がかすみ・大きな波となつて瞼の中で
揺れる

ふと気付くと碧の肩に優しく添えられた暖かい手・ひろみの手だ
「ねえ早く座りなよお そこが みどの『指定席』なんだから」

碧を着席させ クシャクシャになった台本を手渡した ひろみは
振り向きざまに スタッフを見渡し スタジオ全体に響き渡る大声で
「じゃ 3分後に通しり八入りまゝす！スタンバってくださいーい」

その声に合わせて 全スタッフが 引き締まった表情に戻り それぞ
れの
持ち場 ……それぞれの「指定席」に向かった

2章 1 波打ち際（前書き）

作者入院のため11月投稿が出来ませんでした。
入院期間の経験をヒントにした作品を次章投稿予定です。

2章 1 波打ち際

群集心理には人と人を結束させ ある方向へ誘導する底知れぬ力を
発揮する半面 個性や異質に対して拒絶 排除し そして攻撃する
危険性をも孕んでいる。

現実社会に内包された その心理と人の弱さ 稚拙さに向き合っ
ていかなければ生きていけない。しかし現実には群集の一部に甘んじ
傍観者の如く目を背けて事勿れを決め込んではいないだろうか・・・

「若杉 碧」はある少年の死に関わりを持ち 集団的エゴイズム
や傲慢さ

誰もが持つ醜い闇の部分に 流され そして 押し潰されそうにな
る・・・

そんな暗雲渦巻くスクランブル交差点で立往生し 苦悩し「碧」は
やがて・・・

真相とは 報道とは そして 真実を伝える事とは・・・

その夜も いつもと変わらない日常が流れていたはずだった。
夕飯時になっても帰宅しない息子を探しに「大内輝美」は勝手口か

ら裏庭の脇を通り 足元が すっかり暗くなった 柿の木の道を道路に向かって歩いていった。台所の面格子サッシからは トーク番組のパネラー達の笑い声や拍手 そして蛍光灯の明かりが漏れていて目がなれてくれば何とか歩ける。輝美は道路沿いに建てられた赤サビの目立つ古いトタン葺きの車庫に差し掛かった。

いつもなら閉まっているはずのシャッター横のアルミ扉が 完全に閉まっていない事に気付き 白サビの浮いたドアノブを引き 細長い金属音と合わせ暗い車庫に うつむいたまま足を踏み入れた・・・輝美の記憶や人の感情は その瞬間から喪失し深い闇の中に置き去りにされた。

北都秋田市あきたしの中心地から北へ車で15分も走ると周辺は 田畑と新興住宅が混在する地域になる。都市部からの開発の波しんしょうくと古くからの農村集落の境界線辺り

ちょうど 波打ち際なみうちぎわといった感じの風景を醸し出すエリアだ。

夕日の明るさが未練を残しつつも 1日の中で特に物哀しさを感じさせられる「暮れ泥むなす」―― そんな時間帯だ。

自宅に向かう「大内清晴おおうちきよはる」は右手に中学校指定の通学カバン 左手に剣道部の着替えが入った補助カバンを抱え ようやく板についてきた学生服に身を包み

不確かな重い足取りで帰路の波打ち際を 俯き（うつむ）加減かげんで歩いているがその足取りは単に荷物の重みからくるものでは なさそうだ。

自宅に近付いた事を愛犬「リュウ」が盛んに鳴く声で知り 顔を上げ 改めて見る自宅が やけに小さく そして遠く感じた清晴だった・・・

清晴は 改めて自分の部屋に入ると 真っ先に勉強机の引き出しを開け

日々思い立った事柄を不定期に書き込んでいるノートに目を落とししばらくの間 几帳面に書き綴られた自らの心の叫びを物憂げに見つめた

母親が帰宅する前に行動を起こす必要がある 清晴は不確かな足取りで勝手口から外に出た……
虚ろな視線の先に 今は物置きとして使っている古いトタン葺きの車庫がある

この空間は清晴が幼い頃から 独りで遊び場として度々身を置いていた
農機具 自動車部品 大工道具 少年の好奇心を十分に満たしてくれる遊び道具が所狭しと積まれている

薄暗い空間に存在する木造の梁にもトタン屋根にも そして古いオイルの微かな香りさえ 母の懐にも似た温かさ^{ふしじろ}が詰まっている そんな空間だ

清晴は淡々と作業にかかる

黄色と黒色で交互に織り成されたトラロープの先端を投げ輪状に結び反対側に延びるロープの途中を物置の柱下部にグルグルと何度も巻き付けた

先端のリング状の部分を黒ずんだ木造梁の上に目がけて投げ上げた
乾いた物が擦れる音と共に 梁上から白い霧状の埃が静かに降って

いく

奥に立て掛けられた脚立を重そうに引きずり出すと脚立の脚を広げるとロープ

の真下に固定した

間髪入れずに その段を一気に上り 慣れ親しんだ空間を違う角度から眺め

その視線を右手に持つロープのリングに移し 頭からかぶり首にまわした

数秒の躊躇・・・

「ゴボツ・ゴボゴボツ・ゴボツ」閉塞音が清晴を襲う

「た・す・け・て・・・」渦巻く水に掻き消され水面めがけて無数に吹き上がる自分の分断された声・・・

瞬間フラッシュバック・・・ 水面に乱反射する歪んだ風景を 数人の同級生らの手で押さえつけられた水の中から もがき見た・・・言葉では言い表せない光景

「た・す・け・て」自分の発した魂の叫び それが耳から離れない もう戻る場所などない そして戻りたくもない 消し去りたい現実

「ゴボツ・ゴボゴボツ・ゴボツ」その恐怖に背中を圧されるように脚立を蹴る

「ビーン」ビニール製のロープがつまびく弦の甲高い音が 狭い空間に小さく響き渡った 同時にアゴの下から脳天までをハンマーで殴られたような衝撃が走り 首の下が摩擦で焼けるほど熱い

つま先で脚立を探るものの 探し出せるはずもなく ロープの軋む音だけが空しく頭蓋骨を小刻みに微動させている

混乱する思考の中 本能だけが 最後の未練を模索している 頭上

に存在するロープをまさぐり掴み 身体を支え上げようと画策する
が徒勞に過ぎない

「死にたくない！」 清晴の魂の叫び その叫びを打ち消すフラッシュ
ユバツク

遠くで「リュウ」の哀しい遠吠えがしている・・・最後に少しだけ
救われた

安らかな思いに 熱いものが頬を伝った その感覚が最後の感覚だ
った

2章2 心の叫び

第一報は北都新報の社会面に7行半に凝縮された

『・・・町の自宅車庫で、

この家に住む中学1年の男子生徒

(13)が首をつつて死亡しているのを

探していた母親が見つけた。

城西署は現場の状況から自殺とみている。

遺書は発見されていないという。』

注意深く読まないと読み飛ばしてしまうほどの混在記事・

交通事故や火事と同じく最低限の事実関係だけを

淡々と記したものだっただけ

プライバシー保護と少年の名誉を主眼に

あえて「少年A」として扱われ

第三面の片隅にあてがわれた

「埋め記事」程度の代物だった

この記事の取材草稿は北都新報記者部の佐竹だ

碧から特ダネ狙いの佐竹で「特竹さん」

と呼ばれている 元窓際記者である

佐竹は ここ最近自分のジャーナリスト魂を
揺さぶる事件に遭遇しておらず
いくぶん欲求不満ぎみの記者生活を送っていた

地方紙の北都新報は以前在籍していた

全国主要都市に支部を置く大新聞社のように

政治部 経済部 スポーツ部 社会部

といった垣根がない分 自由な取材と執筆活動が

出来る反面 ジャーナリスト魂を熱く揺さぶり

徹底的に攻めたいソースに巡り会っても

一つ一つ緻密な取材を積み上げて記事を完成させ

その「作品」を全国に発信し 即座に生きた反応を

過敏な記者の肌で感じる醍醐味に欠ける

マルチで広い意味の総合力が要求される地方紙と

徹底した専門知識と地道に積み上げたコネクションの数が

モノを言い 取材力が問われる全国紙……

・・その日 佐竹は3交代制シフトの非番だったが
デスクで暇をもてあましていた

椅子の背もたれに上半身を預けて

煙草で薄黄に変色した 天井全体を見上げ

「はあゝヒマだなあゝ」

と吐き出すようにつぶやいた時だった

「プッププツ」山と積まれた書類の下から内線電話の

こもった呼び出し音がした

佐竹は落ちる直前までのびた煙草の灰をそつと

アルミ製灰皿のふちに振り落とすと 慌てて書類の束を移動させ 手早く受話器を取り上げた

内線は総務部からだった

「社会面に掲載された自殺記事の件でお話したい・・・」
といった自殺した少年の母親からの電話だったらしい
最低限の連絡先を総務部で確認し記者室へ
取材照会の内線が廻ってきたようだ

大内輝美の名前に佐竹の記憶は即座に反応し 伝えられた
番号へ火の点いてない煙草を指に挟んだままプッシュした

おおうちきよはる
大内清晴少年の部屋は前回取材した時と
変わっていなかった

整理整頓された部屋には日本史が好きだったのだろう
郷土三英傑の書籍が目立ち この年頃の少年の部屋に
ありがちな 漫画の類は一切見当たらない

勉強机の上に余計な物は一切なく使用する度に片付けて
いた 几帳面な性格がうかがえる

立ち会った 輝美は前回の取り乱した姿からは落ち着きを取
り戻したものの 幾分やつれた感じで髪もまとまりがない

一際細くなった指が机の引き出しに掛かり重そうに引くと
そこには ポツンとキャンパスノートが一冊収まっていた
輝美は慎重に そのノートを抜き出すと佐竹の前に置き

「読んで・・・ください・・・」　か細い声を搾り出した

佐竹もそのままの位置で何も書かれていない表紙を慎重にめくり　細かく羅列された文字に目を落とす

日付とその日の出来事が淡々と綴られているが

日付が飛び飛びになっていることから

日記というより重要な項目を時系列に

書き綴ったドキュメントとしての性格が強い

読み進める佐竹の指は次第にページ端に

掛かったまま重くなっていき

ため息と共に最終ページまで到達せずに止まった

ここ数ヶ月　同級生から受けた「イジメ」の

実態が日時実名と共に克明に記され

その内容が「からかい」から「犯罪」へと様態を変えやがて少年の心を蝕み　そして破壊していく・・・

その様が　文字から余白に滲み出て

目で追う側の深層部を　深く不規則に揺さぶる

入学間もない日付・・・

『・・・学校からの帰りにカバンとか持たされた最初はジャンケンだったのに最後は僕だけ・・・』

爽やかな季節の日付・・・

『・・・くつ隠された　上履きで帰った光雄くんかな』

梅雨の頃の日付……

『……帰りに傘とられた　また光たちだ　濡れた』

衣替えの頃の日付……

『……ゲーセン行った　光にお金とられた　毎日毎日』

暑くなる頃の日付……

『……アイツらに　また　お金出せって　便所で殴られた』

夏休み直前の日付……

『……体育の前　女子の前で全部脱がされた　サイアク！！
先生に言っても信じてくれなかった……』

夏休みに入って間もない日付……

『……草生津川でアイツらに沈められた　何度も何度も
もう終わり　全部……』

夏休み後半の日付……

『今日……　擦れそうな文字で終わっている』

翌日　続報が北都新報に載った

『……町の自宅車庫で、

自殺した少年の部屋から虐めを示唆する
日記が新たに見つかり、事態を重く見た

城西署では恐喝、傷害容疑を視野に
再調査の方針。』

この記事に対する反響は大きかった
多くの問い合わせは

「日記の内容が知りたい・・・」

「追加記事が読みたい・・・」

記者室の電話は終日 鳴りつ放しだった

佐竹は 受話器を強く握り締めると

この多くの生の声を そのまま

清晴の母輝美にぶつけた

「清晴君の特集をさせて下さい」

「・・・・・・・・・・」

「取材して事実を伝えたいんです」

「・・・・・・・・・・」

「このままでいいんですか」

「・・・いえ」続く言葉は出ない

受話器を置くと 佐竹は愛用の原稿用紙を

取り出し 別企画のまとまりかけた骨子部分を

何枚もまとめて剥ぎ取ると 乱暴にまるめてゴミ箱へ

投げ込んだ 上司と両親の説得は後だ！！

新たなページの中央上に大きくタイトルを書きなぐった

『心の叫び』

佐竹の脳裏には清晴によって綴られた何枚かの
心の叫びが焼き付いて離れない

代弁するペンは 一心不乱に原稿用紙を走った

そして この企画は闇に埋もれて歪みが生じた
「子供社会」に一石を投じることになる・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6542c/>

真相と虚構の狭間で

2010年10月10日12時16分発行